



### 憧れの職

◎大槌の隣の山田町で理容師として働いている金崎瑞季さん(24)。大槌高校を卒業してから理容師の資格を取得、「いつか、大槌でみんなに愛される床屋さんを開きたい」と話す。結婚して姓は小林から金崎へ。震災の時、避難所にボランティアで訪れた理容師に憧れ、今の仕事を選んだという◎津波から3日後の2011年3月14日。通っていた大槌高校が避難所になり、食事や飲み物を配る金崎さん(左から3人目)。まだ1年生だった

東日本大震災  
7年半

## この町で一歩ずつ

避難所になった高校でボランティア活動の先頭に立ち、多くの人のために夢中で働いた女子生徒がいた。今は笑顔のすてきな理容師になって、地元の人に親しまれている。倒壊しそうな病棟から入院患者を次々と避難させた看護師は、内陸に移った病院で



◎高台から大槌町の中心部を望む。防潮堤や住宅が建ち、夜の街並みを温かな光が包むようになった◎2011年3月13日、がれきに埋め尽くされた大槌町の中心部。今なお、417人が行方不明のまま(8月末時点)

### 温かな光



### 祭り再び

「曳き船まつり」に参加する大槌町の養殖業黒沢義昭さん(57)の漁船。「震災後、初めての曳き船なので気合が入る。大槌の復興した姿を見せたい」と黒沢さん。祭りでは、色鮮やかな大漁旗を掲げた漁船12隻が湾内を巡る＝大槌漁港

### 岩手・大槌

後輩を指導しながら働き続けていた。今月22日、町の漁港で「曳き船まつり」が開かれる。住民は大漁旗を人念に手入れして、8年ぶりの祭りを心待ちにしている。三陸沿岸の中心部に位置し、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町。そこに住み続ける人たちの7年半を追って

(写真部・坂本孝明、佐藤将史)



### 命支える

◎県立大槌病院で働く看護師の上野萬電子さん(66)＝左から2人目＝。7年半後の今、病院内で震災を知るただ一人の看護師になった。「あの時の経験を若い看護師に伝えていきたい」と心掛けている◎2011年3月13日、県立大槌病院が倒壊寸前になり、高台にある大槌高校へ患者を移動させる上野さん(中央)。「患者を助けようと、必死の思いだった」と振り返る

